
エヴァと万事屋銀ちゃん

岸 剷生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エヴァと万事屋銀ちゃん

【Zコード】

N6193V

【作者名】

岸 剷生

【あらすじ】

時は14世紀のヨーロッパ。十歳の誕生日に吸血鬼になつたエヴァンジエリンは魔法使いたちに追われながら必死に生きていたが、ある日のことついに追い詰められ崖の下へと落とされる。

崖の下へと落ちていく中、彼女の生きたいという願いを聞いて、哀れに思つた神は彼女の願いを聞き入れて、こことは違う銀魂の世界へと飛ばされてしまう。

人間不信に陥つっていたエヴァンジエリンは最初は銀時たちにも心

を開かなかつたが、次第に彼らの優しさに触れ、心を開いていくエヴァンジエル。

これはそんな彼女が過ごす暖かな日々を書いた物語である。

第0訓 万事屋出動と消えた吸血鬼

時は14世紀のヨーロッパ。

深い森の中を必死に逃げ惑う幼い少女の姿がそこにあった。足下まで届く長いウェーブがかつた金髪を揺らしつつ、少女は必死に背後から自分を追つてくる追跡者から逃げる。

「ハア、ハア、ハツ、ハア・・・・・・」

荒く息を吐きつつ、肩口に負った傷口から溢れる血を止めようと直接傷口を押さえるが、走る度に身体に走る激痛に顔を顰める。

すると、後方から浴びせられる魔法や矢による攻撃が少女を襲う。

「あ、あう、う、あ・・・・・・」

背中を強力な炎魔法で焼かれる感触、鋭い鎌が皮膚を切り裂く感触。それは幼い少女にとつて耐え難いものであった。それでも自分は逃げるのを、走るのを止めるわけにはいかない。

「に、げなきや・・・・・・はやく、ここから・・・・・・」

少女は血だらけの身体を懸命に動かしながら、前へ前へと少しづつであるが確実に進んでいく。追つ手たちは少女の姿を見失ったのか、少女を捜す怒号が森中に響く。

その隙を逃がさずに少女はこの場から逃れたのであった。

「はあ・・・・・、ここまで来れば大丈夫、なはず・・・・・」

少女が避難した場所は森を抜けたところにある泉の辺であつた。泥だらけの身体を見下ろし、少女は皮肉そうに笑つた。

今のお似合いの姿だ・・・・・。
吸血鬼になり下がってしまった自分には。
醜い化け物・・・・・。

でも・・・・・、少女は泉へと身体を乗り出して、泉の水に映つた自分の顔を見つめる。

そこに映るのは可愛らしい、まるで人形のような人間の女の子の顔であつた。パツと見は人間と大差ない自分も、夜になれば血を啜る恐ろしい怪物になる。

少女は怒りに任せて腕を水面へと振り下ろすと、バシャンという水しぶきが盛大に上がる。少女の顔はその衝撃で出来た波紋と共に歪んで消えた。

・・・・・ツ!

その時に傷口に水が被つたのか、少女は激痛に顔を歪め、その可愛らしい瞳をウルウルと潤ませて唇を噛んだ。

傷の治りが遅い・・・・・。恐らく聖水を付けた弓矢を受けたからであろう。その証拠に背中に受けた傷は完治していた。

しかし、そうなるとあまり遠くへはいけない。それにもつじき夜が明ける。真祖とはいえ吸血鬼になつたばかりなのだ。日の光に浴びたら流石に灰となることはないだろうが、皮膚全体に大火傷を負うことになるのは必須である。

だが近くには追つ手がいるし、早く逃げなきゃ自分の命はない。

少女は自分の身体を覆つ大きな木の葉っぱを探し出した。数分後、無事に自分の身体をすっぽりと覆えそうな葉を見つけ出し、それを身体に巻いて少女はヨチヨチとゆっくりと前に向かって歩き出した。

しかし、天は少女に味方しなかつたようだ。

「いたぞ！！ あそこだ！」

「追え、追うんだ！！ 今度こそ息の根を止めるんだッ！」

追撃者たちは「己」の使い魔たちの力を用いて少女の姿を見つけ出し、再び散々に攻撃を浴びせ始めた。

「ツ！」

その攻撃に気づいた少女はどうにかこうにか攻撃を避けるが、それでも少しはその身に攻撃を浴び、声にならない悲鳴を上げる。

「ドゥッ！」と少女は足が縛れたのか地面へと倒れ、その回りを追撃者たちが取り囲む。痛みに潤んだ瞳で少女はキッと追撃者たちを睨み付ける。

そこにいたのは怖い顔をした数人の大男たちであった。皆手にはごつい獲物を持ち、それを迷うことない動作で少女に向けていた。

「フン、手こびらせやがつて・・・・。しかし、年貢の納め時だぞ。この化けものめ！！」

「あうひー。」

ドカツと少女の細い脇腹に男の強い蹴りが浴びせられ、少女はあまりの痛さに息を呑む。

それを合図に少女の身体に容赦なく拳や蹴りが浴びせられた。

「い、いたい、いたいよ！ 亂暴なことはしないでえ！！」

「うひせえ！ 化け物の癖になに命乞いしてやがる！..」

「そうだ！ この化け物め！！」

浴びせられる容赦ない暴言と暴力。

少女は瞳をギュッと力強く瞳を閉じた。早くこの暴虐の時間が終わるのを信じながら・・・・。

しかし、少女の願いとは裏腹に、一人の大男の手によつて少女の身体は宙に持ち上げられた。

つっすらと目を開くと、眼前に映つたのは残虐な笑みを浮かべる男の顔であった。ついで視線を足下に向けると、暗闇に満ちた奈落の底が広がっていた。

どうやら知らぬ間に自分は崖のすぐ近くに逃げていたようだ。それで男たちは魔法やら矢を放つのが億劫になつたのであらう。手つ取り早い方法としてこの少女を崖下に落とすつもりなのだ。

その証拠に簡単に這い上がれないように、少女の細い足首に鉄球の付いた足枷を填めたのだから。

「な、何するの…………。やめて、やめてよ。私、まだ死にたくないよ…………。」

少女は怯える子兎のよつた瞳でそう男たちに訴えるが、男たちは無情にも少女の腕を掴んでいた手を離した。

「あばよ、化け物」

フワリと自分の身体が宙に浮くのを感じ、そしてすぐに身体が地面へと引っ張られるのを感じた。

男たちの醜悪な顔が上に上garのとは反比例に、自分の身体はどんどん暗闇の中へと落ちていく。

少女はムクムクと湧き起る死の恐怖に絶望しながら、眦に特大の涙の粒を浮かばせた。

（私が…………、私が何をしたって言つの？　私は何も悪くないのに！－）

生きたい！　生きたい！　まだ、死にたくない！－

少女の願いが届いたのか、少女の身体が淡い光に包まれ始めた。

すると少女の身体は光の粒になつて、この場から跡形もなく消えたのであった。

さて場所もかわつて、江戸の歌舞伎町の一角にある万事屋銀ちゃんに話は移る。

天人が地球へとやつて来てから、古き良き地球の文化はガラリと変わつた。

新たに得る物の他に失われた物も多くあつた。

その一つに挙げられるのは侍であつた。

天人を排する為に人間が起こした攘夷戦争であつたが、その天人に完封なきまでにやられた侍は日本中から姿を消した。廃刀令と共に・・・・・。

しかし、その世の中に一人だけ侍魂を持つ男がいた。

その男の名は坂田銀時。

スナックお登勢の一階部分に万事屋銀ちゃんを営み生計を立てている。

普段はちやらんぽらんな性格の持ち主であるが、いざという時にはやる氣を出す男である。

その万事屋には彼の人柄を慕つて、一人の人物が従業員として働いていた。

一人目は志村新八。眼鏡をかけた、何の特徴もないオタクである。

廃道場を建て直すために必死に働く姉を補佐するために万事屋へと入ったはいいものの、仕事がなく未だ給料を貰つていないので、結局姉に苦労させている駄眼鏡である。

もう一人目は神楽。宇宙最強の先頭民族『夜鬼族』の少女であり、大食らいかつ馬鹿力を誇る少女である。日差しに弱いためいつも番傘を持っている。

ヒロインであるのにも関わらず毒舌は言つわ、ゲロは吐くわ、史上最底のヒロインとして知られている。

その三人を仲間に加え、万事屋銀ちゃんは今日も江戸を駆ける・・・。

「つて、何だよこの前書き。ぶつちやけこんなの必要なくね？」

「そうアル！ 作者の駄文を見るくらいなら、とつとと本文を始めたほうがいいアル」

「まあまあ、そう言わないで二人とも。簡単に紹介した方がいいでしょ？」

「つっても、これただの悪口じやねえか。もはや自己紹介というより、セクショナルハラスメントじやねえ？ こんなのバツゲームじ

やねえか

「そつアル。初っぱなからこんなに貶されるなんて、いたいけな少女の心は深く傷ついたネ」

「いいじゃないですか!! 僕なんてたつた一行しかないんだぞ!! つか、駄眼鏡つて何だよ!! 全国の眼鏡の人々に謝れ!!」

と、いつものようにギャーギャーとつるわべ叫ぶ万事屋一行。

そんな三人の前に珍しく客が訪れた。

客の名はめんどいから客1号でいいや。

新八は銀時たちと騒ぐのは止め、客1号を居間へと通すとソファーに腰掛けるように薦めた。それからお茶を入れにキッチンへと向かう。

「んで、」の万事屋銀ちゃんに何の用なんだ?」

銀時が主らしく椅子に深く腰掛けドカッと足を組んで机に乗せた体制のまま、そう客に問うと、

「はい・・・・・・、実は・・・・・・」

お客様は静かに依頼内容を口にした。

何でも自分の屋敷で妙な気配がするのだといつ。それも一度や二度でもなく、一日中気配を感じるらしく、夜もおちおち眠れないことらしく。

「ふうーん、気配ねえ・・・・・・。なんか動物とかそんなのじゃねえの？」

「いえ、動物とかの気配じゃありませんでした。お願いです！！この気配の原因を探つてはくれませんでしょつか？ 奈論お礼はキチンとさせさせていただきますので・・・・」

銀時は最初のうちは渋つていたが、お礼と聞くと田の色を変えてその依頼を飲んだ。勿論、目の色を変えたのは銀時だけではない。給料を貰えていない神楽も新ハも同様であった。

三人は互いの顔を見合つと、一々タリとした意地の悪い笑みを浮かべ、それぞれの獲物を手に取る。

「さあ、テメハらー！ 久しづりの仕事だ！！ 気合を入れていけよーー！」

「はい！ 久しづりの給金のためにも頑張ります！」

「オウヨーー！ 酢昆布3箱分貰えるよつに頑張るヨーー！」

銀時たちは元気よく叫ぶと、依頼現場へと駆け出していったのであつた。

第1訓 タンスの向ひにあつたのはナル アじゃなくて、金髪幼女ッ！？

銀時たちは依頼主の家に貰つた合鍵で入ると、まず家を見て最初に抱いた感想はといつと。

「でつけえ！！ 何だこの家の広さは…？ 嫌みか？ 金がない俺に対する嫌みなのか？」

「すつ」、「アル！！ 銀ちゃんのあのボロ家が十軒くらいに入る大きさアル！！ ワタシ一度でいいからこんな大きな家に住んで、日がな一日ボロボロしながら酢昆布囁きたい」

「いや、それは今とあんまり変わらないんじや・・・・・・」

と、二者二様の感想を述べる。

しかし、そんな感想も出てしまつほどにこの家の大きさは半端なかつた。歌舞伎町にしては大きすぎる屋敷を目の前にし、銀時はギリギリと歯ぎしりしていた。

いや、この家とあの家を比べても逆に虚しくなるだけだろうに・・・
・・・・。頭に血が上っている銀時はそのような簡単なことにも気づかない。

そんな銀時を新八は軽く怒鳴りつけて正気に戻すと、家の柱に鼻糞を擦りつけている神楽と未だブツブツと咳いている銀時を促しつ家の中へと足を踏み入れた。

客一号から聞いた情報によれば、気配を感じるのは自分の寝所らしい。あの部屋は気配を感じないのだが、自分の寝所に入つたら何か鋭い、まるで肌を刺すかのような気配を感じるらしいのだ。

「…………仕事をしやすいよつにつて給仕の人たちとかを外に出しているみたいですが。いつ家が広いとかえつて落ち着かないといづか」

新八はキヨロキヨロと中を見渡しながら呟く。

銀時もあまりこういう広い屋敷とは縁がないか、妙にソワソワと落ち着かない様子であった。

「ああ、なんつーか落ち着かねーな。…………なんつーの？ 普段貧乏暮らしだとこついう金持ちの家に来ると妙にテンションが上がるつーか。はつ、これはまさか修学旅行前の夜なかなか寝れないという心境に似ている気がするのは俺だけ？ ねえ？ 俺だけかなぱつつかん？」

「知りませんよ。つて、今はそんな下らなことを言つてる場合…………あれ？ 銀さん、神楽ちゃんは？」

新八が銀時の問いに素つ氣なく答えるも、さつきまで横にいた神楽の姿が見えないことに気がつき、新八は銀時に尋ねる。

しかし、銀時はしらねえよと首を振つて答える。

どこに行つたのだろうか？ と一人頭を捻つて考えていると、

「キャッホーイー！　凄いアル！！」

と、二階からえりくハイテンションな神楽の声が響いてきた。

その声を頼りに広い廊下を渡り一階へ続く階段を見つけると、一段飛ばしで階段を駆け上がっていく。どうやら神楽がいるのは一番奥の部屋のようであった。

新八はスパーンと勢いよく襖を開け、ズンズンと足音荒く中へと入る銀時と新八。

部屋の中へと入った新八と銀時が見たものはといつと・・・・・・

「か、神楽ちゃん・・・・・・。何してるの？」

「ん？　ああ、新八に銀ちゃん。ビーしたアルか？」

新八の問いかけに神楽はキヨトンとした面持ちで返事した。

新八と銀時は啞然とした面持ちで神楽を見つめていた。なんと神楽は今まで来たことのない様な豪奢なドレスに身を包み、手にはえらいリアルな着せ替え人形を手にしていたのだから。

「ちょ、神楽ちゃん。その服どつしたの！？」

「これアルか？　そこら辺に落ちていたアル」

「んなモンが落ちてるわけねえだろ！　つーか、テメエその服ブカブカじやねえか！　明らかに無理に着たよね、それツ？」

銀時が神楽の着込むドレスを見て指さしながらつっこんだ。確かに神楽にはだいぶんサイズが大きいようで、肩からずり落ちていたし、袖もブカブカでまるでキヨンシーのようであった。

「なんだよー。せっかく着てやったのに。なんか興ざめだ。もうこんな脱ぐアル

神楽はつまらなそうに唇を尖らすと、着ていたドレスを脱いで床に放った。新ハは慌てて皺になる前にドレスを拾って、手近なハンガーに掛けて壁のフックに吊した。

「神楽ちゃん、あんまりへんなことしないでよ。せっかくの依頼がパーになっちゃうじゃない」

「はいはーい、分かりましたー」

と、生返事で答える神楽。そんな神楽に新ハはピキッと眉間に青筋をたてて怒鳴りうとすると、ふと神楽の持っている人形に気づき、それを取り上げようとして手を伸ばす。

「神楽ちゃん、まだ人形なんか持つてるの？ダメだよ、勝手に余所様の物をいじつたら」

「なんだよー、新ハはブツブツ五月蠅いあるなあ。お前はワタシの親アルか？ そんなんだから女にもてないんだ！」

「何だとこのクソアマーテー！ テメヨー やつぱぱ星に帰れーー！」

と、新ハと神楽はいつものように互いを罵りあいながら取つ組み

合いを始めてしまつ。神楽は手に持つた人形を部屋の隅で他人事の
ように鼻をほじついていた銀時へと投げつけてしまい、それが見事銀
時の頭にクリーンヒットしてしまつ。

「・・・・・・ツ！ つたく、喧嘩してるときに物投げるなんてよ
ー。あいつら動物園にいる客にウンコ投げるゴリラと一緒にやねえ
か」

銀時は人形が当たつたところをさすりながら、足下で俯せに転が
つた人形を拾い上げる。それをひっくり返して見た瞬間、銀時は油
の切れた口ボットのようにその動きを止めた。

そんな銀時の異変に気づいたのか、新ハと神楽は争うのを止めて
銀時の方へと歩み寄つた。

「銀さん、どうしたんですか？」

「銀ちゃん、人形に何か付いてたアルか？」

銀時は顔を俯かせたまま、恐る恐るといった風に口を開いた。

「・・・・・・神楽。お前、この人形こんなのが付いてたぞ」

銀時はズズイと神楽に手に持つた人形を見せつける。神楽と新ハ
はよく見ようと人形に顔を近づけさせる。たちまち一人の顔は血の
氣を失つた。

人形の服には赤い文字で『 子死ねえええ！！！』と書かれて
おり、人形の顔は傷だらけで、元の愛らしい顔など見る影もなかつ
た。

「か、かかか神楽ちゃん！！ この人形最初からこんなんだつたの
！？」

「知らないヨ！！ 人形が落ちてたから拾つただけアル！！ こんな不気味なん知つていたら拾うはずないネ！！」

「いや！！ テメエの事だからよく見ないで拾つたんだろ！？
だからあれほど脇が酸つぱくなるほどいつてんじやねえーか！！
落ちてる物を拾つなって！！ ああー、もう帰るぞ！ これ以上こ
こにいたらうくなことになんねえーよ」

と、銀時は手にした人形を放り投げ、玄関へと向かおうとするのを、新ハは腰に抱きついて止めようと試みた。

「ちょ！－ 銀さん仕事どうするんですか！？ 久しぶりの仕事ですよ！－ もうお金がないですから仕事を選べれないんですよ、僕たちは」

「んなもん知るかあ！－－ 金より命じやあ！－－ こんな呪われた屋敷で仕事が出来るほど、俺は神経図太くねえ－－んだよ！－－」

帰る、帰らない、帰る、帰らないと言い合つてゐると、何やら大きな物音が隣の部屋から聞こえてきてたのと同時に、身体を差すような視線が三人の五感にひしひしと伝わつた。

しばらくの間を置いた後、銀時が部屋の隅に置いてあつた「ミバケツ」に身体を突っ込もうとしていた。それを見た新八が銀時の腕を

掘んで止める。

「うふ…… 銀さん、ビニールをしてるんですか……」

「ほ、ほら。アレだよアレ…… ドラ もんのいる世界に通じているんだよ……」

「んな訳あるかあ！ いい加減現実逃避するのを止めてくださいよ……」

ギヤー、ギヤーと言ふ二人を尻目に、神楽は気配のする部屋へと向かっていた。

「全く一人はお子様ネ。」これは一つ歌舞伎町の女王である神楽様が一肌脱いでやるアル

神楽は抜き足差し足忍び足で部屋の中へと足を踏み入れる。

襷を飛び蹴りで蹴り破り、まるでアクションスターのようにゴロゴロと転がりながら、部屋の中へと入る。それからカンフーポーズを取り、キヨロキヨロと視線だけを動かしながら部屋の様子を窺う。

えらく年のは少し趣味な外装なだけで、とくに変わった様子ではなかつたものの、神楽は慎重に辺りを探りながら夜兔のカンで気配がする方へと向かう。

その場所とは・・・・・、そう洋箪笥が置いてある部屋の隅であつた。

「・・・・・ゴクリ」

神楽は睡を嚙下しながら、震える手でタンスの取っ手へと手を伸ばす。グッと取っ手を掴むと勢いよく引っ張った。

すると、タンスの中から何かが神楽の方へと落ちてきた。

「つおつとー！ 何アルか？」

神楽はタンスの戸を閉めると、自分の方へと倒れ込んだ何かへと視線を下ろすと、何とそこにはいたのは血まみれの自分に似た年の金髪少女であった。

それを見た神楽はパアアアアアと満面の笑みを浮かべたのであった。

第1訓 タンスの匂いがしたのはナル アじゃなくて、金髪幼女ッ！？（後

今日はいいまでです。次は一話更新しようついでに、
HゲーゲンジHリーンを早く動かしたいです（^ー^）

第1・5訓 嘸の漫セヒト傷だらけの身体で

(……………！」はビードラウフ？)

少女は長い眠りから覚めたときのよつな、妙にほんやりとした心地のままふとそんなことを思つた。いやに身体が重く、ズキズキとした鈍痛が身体内を駆けめぐる。

辺りは暗くて狭く苦しく、息が詰まりそうだつた。ビードラウフかビ臭く吸血鬼である少女には耐え難い臭いであつた。一刻も早くここから逃げようと藻搔くが、その度に身体の節々が痛む。

「…………ッ……！」

少女はその痛みに息を殺して喘ぐ。

長距離を走り続けた時のような浅い呼吸を何度も繰り返し、襲いかかる鈍痛から逃れようとする。だが、あんまり効果はないようだ。

そう言えば……………と少女は痛みに耐える中でふと呟いた。

(……………崖から落ちたはずなのに、どうして大した怪我もなしにいられるんだろう？私は吸血鬼だから死ぬことはないだろうけど、肋骨や足の骨は折る大怪我は免れないはず……………なのに何故男たちに受けた傷だけなのかな？)

そう。自分は崖から錘を付けられて落とされたのだ。なのに大した怪我もなしにこうして存在している。それにここは崖の下ではなく

それもやつだつた。

奈落の底に横たわつてゐるならば、天井から一筋の光が見えるはずなのに。ここは光も何も入らない。まるで監獄のよつたな場所であった。

（とにかく早く逃げなきや…………。もつすぐ夜が明けてしまう）

それに・・・・・、喉も渴いてきた。カラカラになつた喉が血を求める。己の喉の渴きを潤わすために、ただただ貪欲に人の生き血を求めていた。

（血が・・・・・、血が欲しい。あ、ああ、血を、血を飲ませて）

激しい吸血衝動が脳内を支配し、少女はガリガリと喉を爪で搔きむしる。皮がむけてうつすらと血が滲んでいるが、今の少女には痛みという感覚はない。あるのはただ血を欲するといつ野生じみた本能だけであった。

青色の瞳も今は血のよう赤く染まり、瞳孔も猫のように細くなつていて、少しだけ開いた口の隙間から長く伸びた犬歯がチラリと覗いていた。

「ふつ、ああ、うー、ああ・・・・・、ううー！」

思つのように身体が動かない。その原因は足に填められたこの鉄球つきの足枷であろう。それに気づいた少女は渾身の力を込めて外そうとする。

だが、鉄球に触った瞬間に己の手の平に火鉢を押し当てたような激痛が走るのを感じ、慌てて鉄球から手を離す。どうやら鉄球の表面に聖水を塗り込んでいるようだ。

その痛みで少しだけ正気に戻り、少女は苦々しい表情を浮かべ、グッと唇を噛み締める。ほんの少しだけ口の中に血が広がったが、自分の血なので喉の渴きはさほど満たされない。だけど何もないよりはマシなので、少女は己の血を少しづつ飲む。

もどかしい。こんなことでしか自分を保つことが出来ないなんて。
・・・・・。

最初は嫌で嫌で仕方がなかつた血の味も、今は人間だつた頃によく飲んでいたミルクティーより、甘く感じた。血の味は鮮明に分かるのに、他の食べ物はあまり味を感じない。

吸血鬼にとって血を飲む以外の食餌行為は、ほとんど嗜好として行われる。勿論、自分もそうだ。人間だつた頃に食べていた食べ物や飲み物を好んで食べているが、吸血鬼になつてからは一度も美味しいと感じたことはない。

それでも自分は人間だつた時のことを見たくなくて、こういった行為を無為的に繰り返しているが、あんまり効果はなかつた。

日が経つにつれ、吸血鬼の衝動が強まる一方であった。

今の自分に出来ることは、そんな吸血鬼の衝動に飲まれないよう堪え忍ぶことであった。

少女は膝を抱え込み、ただ一点だけを見据えていた。時間も分か

らない暗闇の中で、少女はただずつと孤独と痛みに耐えていた。

あれから何日が過ぎたのだろうが・・・・・・?

この暗闇の中では時間も何も分からなかつた。外に出て新鮮な空気を吸いたかつたが、衰弱したこの身体では不可能に近かつた。それに吸血鬼である自分にとつて暗闇は心地よかつた。

それにここにいれば人間から命も狙われない。わずか数?ばかりの空間が安住の地となつていた。

だが、たまに人の気配がこの壁の向こうから漂つてきた。嗅覚が敏感な自分には例え壁越しでも探知することが出来た。

その度に少女は吸血鬼だけが発する「」との出来る気を放ち、人間を自分の周りから遠ざけた。

それのおかげで自分の居場所をばれずに済み、ホッと胸をなで下ろしたのも束の間、数人の人間の気配を感じた。

それもドンドンと近づいてくる。少女は身体にジットリとした冷や汗を流した。

どうしよう・・・・・・・・! もし私の居場所がばれたら! -!

今度こそ息の根を止められるだらう。だとしたら追い出すしかない・・・・。

再び気を発すると、一瞬の間の後、人間たちが騒ぐのを感じた。

(？妙に騒ぐ人間たちね・・・・。話す内容はよく分からな
いけど・・・・。)

身体を縮こまらせて、ジッと人間が立ち去るのを待つが、その願いは通らなかつたようだ。

自分のすぐ近くで一人の人間の気配が感じられ、私はビクッと体を大きく震わせた。

瞳をギュッと閉じて息を殺して待つ。

すると、バーンとした大きな音が響いたのと同時に、自分の視界が真っ白な光に埋め尽くされた。あまりの眩しさに少し呻いて、前のめりに倒れると誰かに支えられるのを感じた。

恐る恐る瞳を開いてみると、そこにいたのは自分と似た年の女の子の姿がそこにあつた。

第1・5訓 暴の過かとい傷だらけの身体で（後書き）

書きました。吸血鬼少女つていいっすよね・・・・・。

第2訓 金髪幼女は飼つちゃいけませんバラノイドッ！？

神楽は自分の手中にいる金髪美少女を見つめた後、目を大きく見開きキラキラと輝かせる。その様子ときたら真新しいオモチャを手に入れた時の子供のようであった。

「凄いネ！！ リアル人形アル！！ ワタシテレビでしか見たことないアル！！」

と、神楽はウキウキとした様子で脱力した少女を片手で持ち上げて小躍りする。そのまま隣の部屋で騒いでいる銀時たちの元へ小躍りしたまま向かう。

「銀ちゃん！！ 新八！！ 凄いの見つけたネ！！」

パンツ！ と片足で器用に襖を蹴り開けて入ると、そこには互いの服の襟首やらを引っ掴んで言い合ひ銀時たちがいた。

銀時と新八は神楽の声と襖の開く音に気づき、そっちの方へと視線を向ける。

「んだよ、神楽。テメエー、今までどーに・・・・・・」

「？ どうしたんですか、銀さん。急にかたまちやつて？ あつ！ 神楽ちゃん、隣の部屋でなにして・・・・・・」

二人とも神楽へと視線を向けた瞬間、シリと音を立てて固まつた。額からはダラダラと多量の汗が流れ落ち、顔色も見る見るうちに蒼白になつていく。

まあ、それもそのはず。何せ神楽ときたら、ぐつたりとした金髪の美少女を片手で持ち上げているのだから。「れを驚くな」と叫つ方が無理があるだろ!」

「どうしたネ？ 一人とも。まるで死にかけの魚みたいな顔アル。まあ、銀ちゃんは元からそんな顔してアルけどな」

「ああ！？ 何だと！？ つて、俺の顔のことはビードもいいんだよ！？ あれ？ 本当は良くないけどね！？ こには良しと言つことにしておけ！？」

「つて！？ そんな下らないこと言つてはいる場合じやないでしき、銀さん！？ つていうか、神楽ちゃん、その女の子ビード手に入れただの？」

新八はいきり立つ銀時をビードと押さえると、未だ少女を大事そう？ に持つ神楽へと尋ねる。

すると神楽はフン！？ と勢いよく鼻息を出すと、ない胸を田一杯反らして、

「フフン、聞いて驚くなヨ、新八。これは隣の部屋のタンスの中に入つていたアル！？ ナル アじやなくて、リアル人形が入つていたアル！？」

神楽がそう言い放つた瞬間、三人の間に妙な空気が漂つたが、それは新八の放つたつっこみの声で搔き消えた。

「んな訳あるかああああああああ！？ 嘘つくならもう少しマシな嘘つ

けやあああああ！！ 何で普通の家のタンスに金髪少女が入つてんだよ！！ 幼稚園児でももう少しもな嘘つくわ！！」

「なんだよー。新八は本当に五月蠅いアル。つかこの神楽様が嘘つくはずないネ！！ マジにタンスの中に入っていたアルヨー！！」

と、新八のつっこみにムツと眉根を寄せると、銀時たちに見せつけるようにズズズイと手に持った金髪少女を押しつける。

銀時と新八はウツと顔を歪ませたが、よくよく見ると微かにだが少女の胸は動いており、これは死体でなく生きている人間だということが分かった。

「…………生きてますね、これは。にしても何で女の子がこの家の、しかもタンスの中なんかに…………？」

新八が眼鏡をクイクイと上げながら、まじまじと少女を観察しながらそう呟く。

「さあな、金持ちのすることばでん理解できねえしよ。俺ら庶民にはよくわからねえもんなのさ」

と、銀時は神楽の持つ少女が生きていることに安堵したのか、いつもの様子で鼻をほじりながら淡々と相づちを打つ。

すると今まで黙っていた神楽がハツと何かに気づいたようで、

「この子を誘拐して拉致監禁して、身代金ガツボガツボ手に入れる氣アルヨー！！」

グッと拳を握りしめて力説した。

「！？ ま、まさか・・・・・・、それは考え過ぎじゃないかな、神楽ちゃん。もしそうだとしたら、なんでわざわざ僕たちに依頼を申し込みに？ そんなばれるような、危険なことを犯す必要があるんですか？」

「それはあれネ。ワタシたちに犯罪の片棒を担がせる気アルよ！」

「ゴクリと唾を飲み込む銀時たち万事屋一行。

もしそうだとするならば、この状況は非常にまずいんじゃないか？ もしこれを帰つてきた使用人にでも見られたら、間違いなく銀時たちが罪を被るハメになるであろう。

そうなつたら流石にまずい。この若さで犯罪者になる氣は毛頭ないのだから。

そこまで考えた三人の取つた行動は早かつた。

無言で合図を交わすと、三人は証拠隠滅を計り始めた。まず神楽が手近の布を取り、それで金髪少女をグルグル巻きにし、その間に新ハが微妙に散らかつた部屋を片付け、そして最後に銀時が簾巻きの少女を小脇に抱える。

それから素早く一階の窓から飛び降り、脇目もふらずに駆け出したのであった。

通行人にもばれずに無事万事屋へと逃げ帰れた銀時たちは、安堵の溜息を吐く。

全力疾走で走つたので、三人の吐く息はとても荒かつた。

ハアハアと浅い呼吸を繰り返していると、ソファーの上に置いてあつた簾巻きがモゾリと蠢き、粗めの紐で解けないように括つていたのが、その動きで解けてしまいハラリと布が捲れ、金髪美少女が姿を現した。

どうにか息が整つた銀時が少女へと視線を向けると、ギョッとしたひんむく。

なんと少女の足首には鎖つきの鉄球がはめられており、それを自分がここまで運んできたと思つとゾッとした。

神楽が実に軽そうに持つていたのと、犯罪の片棒という枠に囚われてそんな些細なことなど眼中に入らなかつたのだ。

神楽は夜兔族だ。あいつが怪力娘なのを今更思い出し、銀時はガシガシと頭を搔きむしめた。

にしても俺・・・・ここまで持つてこれる力があつたんだな。人間必死なれば何でも出来るつてか。

あーあ、こんな俺を表彰したいぜ、全くよお。

そんな風に軽いマリッジブルーに浸つてゐる銀時に、

「銀さん、なにウンウン唸つてゐるのですか？」

新ハがジト田でやう尋ねると、銀時は慌てた風に手を振つて答えた。

「つべ！？ いや、何でもねえよー？ ちょっと頭の中で見知らぬおつさんが俺にあることなこと吹き込んでいただけさ」

「はあー、そんなんですか？ まあ、どうせ嘘だらうけど、今は銀さんの冗談に付き合つてゐる暇はないんで」

と、それだけ言つと新ハはクルリと少女の方へと向き直る。あの神楽でさえ銀時に毒舌も吐かずに、金髪少女に夢中であった。

なんだか構つて貰えないなら貰えないで、非常に虚しくなつた銀時であつたが、自分も少女のことが少しばかし気になるので、新ハの隣に胡座を搔いて座る。

「んで、連れて帰つてきたもののビーあるよ、ハハ」

「え？ ああ、ビーしましょうか？」

「フン、そんなもの決まつてゐるアル！！」

神楽は待つてましたとばかりに腕を組んで立ち上がる。

「ハハで飼うアル！！」

と、ビシッと少女に指を突き刺しながら高らかに宣言したのであ

つた。

それと同時に・・・・・。

「ええええええええええええ！」

銀時と新八の叫び声が歌舞伎町の空に響き渡つたのであつた。

第2訓 金髪幼女は銅つかわいけませんバラノイドッ！？（後書き）

今日はここまで。次からエヴァンジエリンと銀時たちが絡み始めます。

そして、皆さんお待ちかねの吸血シーン（＾＾）／＼がありますので、楽しみにしてください。それではまた明日＼＼。

第3訓 吸血鬼って、ぶつちやけ蚊じゃね？

エヴァ サイド

（う・・・・・、何だろう。何だか騒がしいな・・・・・）

私はぼんやりとする中で周りが五月蠅いのに気づいた。長らく血を吸つていなからか、身体が言うことを聞かず、私はその声の正体を確かめる気力も残つてはいなかつた。

やはり自分の血では大した回復力はないのだろ。せいぜい死なぬようにするだけだろ。

まつ、言つならば応急措置といったところだらうか。

そう言えば・・・・・、私を助けてくれた？ 少女はどこに行つたのであらうか？ 私を見ても珍しく怖がらず、嬉しそうに微笑んでくれた少女。

一瞬しか見えなかつたが、私にとつて彼女は吸血鬼なつてから、初めて見た人の笑顔であつた。

それはとても暖かく、心地の良いものであつた。

（それにしても・・・・・、）はどこだらう？ あそこほどじやないけど、とても居心地がいい場所・・・・・。冷たく暗い闇の中でのない、暖かく日溜まりのような場所

それは私が長く渴望していたものだ。吸血鬼になつてから私は平

穏で暖かな、言つなれば安住の場所を探し求めて各地を転々と旅をしていた。

だが吸血鬼の私はどこに行つても、人間に追われ、罵られ、殺されかける始末。

そんな私が唯一安心できる場所は人気の少ない森の中や洞窟であった。

闇と孤独が私の友と思っていた私にとって、久しぶりに感じる温もりに私は涙が零れそうになつたが、それを懸命に堪えた。

だが・・・・と私は泣くのを堪えている間に、胸中にふと不安が渦巻くのを感じた。

もしかして少女は私が吸血鬼だということを知らないのかもしない。

だとすれば、私が吸血鬼であるということを知れば、今まで出会つた人間のように豹変して私を殺そうと襲いかかつてくるかもしれない。

そう思うと、私は怖くて怖くて身体の震えが止まらなくなつた。

(いやだ！ 死にたくない！！)

そう思えば思ひほど、身体の震えは止まらない。

逃げようと思うが、消耗しきつた身体にはもつそのような気力も体力もない。

私は怖くなつてギュウッと口を瞑つていると、不意にあの少女の叫び声が部屋中に響き渡つた。

「 ジの子はジジで飼うアル…」

私は何を言つてゐるのかはよく分からなかつたが、そのあまりの声の大きさに驚いて口を開けたのであつた。

万事屋サイド

銀時と新ハはとんでも発言をかました神楽を信じられないという風に見つめる。

そんな神楽の発言に真つ先に反応したのは勿論、我らが銀魂のツツコミキャラである新ハであつた。

「 ちよつ…！ 神楽ちゃん、女の子を飼うなんて何戯けたこと言つてんですか…？ 犬や猫じゃないんだから、そんな気軽に飼うだの言つちやいけないでしょ…！ それに家にこれ以上人を養う余裕はありませんよ。さつきの依頼も断つて依頼金もパーになっちゃつたんですから」

「 んだよおー。けちけちすんなアル。それにいつからテメエがいつ万事屋銀ちゃんのオーナー気取りになつたんだヨ…！ テメエは丁

稚奉公だろーが。このワタシに意見するなんて一億光年早いんだヨ」

「んだとゴラーー！！ テメエーだつて丁稚奉公2号だろーが！！ つか僕がちゃんとしてなきやこの店はとうの昔につぶれてんだよー！」

「あー、はいはい。そうですかー。ねえ、銀ちゃん。飼つてもいいアルか？ ねえねえ、ねえねえねえねえ」

と、神楽は新八を華麗にスルーし、いつもの椅子に腰掛けながら耳を穿つている銀時にお願いし始める。

そんな神楽にますます新八はウガーッとキレる。

「なに人を無視してんだよッ！！ つていうか、神楽ちゃん。定春の世話もろくに出来てないのに、女の子の世話なんて出来るはずないでしょーーー！」

ビシッ！ と部屋の隅を指さす。

そこには白い大きな犬が気持ちよさそうにイイジキをかきながら寝ていた。

名は定春といい、神楽が気に入つてこの万事屋で飼うことになった巨大犬である。

その正体は天人が来る前、つまりターミナルが建つ前の天龍門を守つてきた犬神の仔である。馬鹿力で大飯ぐらいで、神楽が獣化したような存在であった。

最初は「ワタシが面倒見るアル」と言つていた神楽であったが、今や定春の世話は新八や銀時の係になつていていた。そんな神楽が人間の、しかもこの様なか弱い少女の世話など出来るはずもない。

そんな定春は神楽達の話など興味がないのか、「フワアアア」と大あくびしていた。

しかし、欠伸をした後に定春はピクリと耳を蠢かすと、ムクリと起き上がり、少女の横たわっている方へと歩み寄る。それから少女の顔をペロペロと舐め回す。

「？ 定春どうしたアルか？ これは餌じゃないアルヨ。囁くのならこいつにしどくアル」

グイッと新八の襟首を引っ掴み、定春の前へとズズイと差し出しが、定春は興味がないようで新八になど目もくれない。

囁まれないで安堵したが、それはそれで寂しいと思う新八だった。不意に視線を下に下ろした新八は少女が目を覚ましており、妙に強張った表情でブルブルと小刻みに震えていた。

「ぎ、銀さん！ どうやら目を覚ましたようですよ！ 神楽ちゃん、定春に退くように指示して。彼女定春が怖いみたいだから」

「おう！ 合点承知の助ネ！ 定春へ、そこから退くヨロシ」

神楽が退くよう指示すると、定春は大人しく指示に従う。定春が退いた瞬間、少女の身体から力が抜けるのが分かつた。

「そいつ、田え覚ましたのか？」

銀時はフツとほじつた耳クソを息を吹きかけて飛ばすと、椅子から降りてこちらの方へと歩み寄ってきた。

それからジーッと眼下に横たわる少女の顔をいつもの霸氣のない瞳で見つめる。

人形のように整つた顔に、明るく輝く碧眼、足首まで伸びる艶やかなウェーブがかつた金髪、どこをどう見ても日本人には見えなかつた。

それに先程から気になつていたのは、彼女の服装等にあつた。

半袖タイプの露出が激しい黒のキャミソール・・・・・・・まあ、これはいいとして。問題なのは身体に走る無数の傷跡と、足首にはめられている鉄球付きの足枷であつた。

年の功は神楽と同じくらいな少女なのに、どうしてこの様な仕打ちを？

ちを？

まあ、思い当たるのはやはり天人関連だらうか？

美少女を攫つて天人のお偉いさんに、愛玩用の奴隸として売り渡そうとか、そんなとこだらう。

現にあつたもんな。ほら、新八の姉貴が借金の形に売られそうになつたの。

まあ、あいつの場合は見かけはいいけど、中身は「ゴリラ」だもんな。

ぶつひやけあれば詐欺だろ？。

あんなのに引っ掛けたら、人生終わりだ。バットエンドだよ、このヤロー。

そこまで黙考した銀時はフムと頷き、

「神楽、新ハ、とりあえず医者呼べ医者。呼べなかつたら薬屋行つて傷薬や包帯買つてこい」

と指示を出すと、神楽は瞳を輝かせた。

「じゃあ銀ちゃん、この子を飼つていいアルか！？」

「馬鹿ヤロー。なんで治療する=飼つてもいいになつてんだよ。このままじや田覚めが悪いだろーが。その話はこいつの手当がすんでからだ」

神楽と新ハは銀時から金を受け取ると、矢継ぎ早に部屋を飛び出し、一田散に薬屋か病院へと駆け出した。

その間に銀時はこの少女へと話しかけた。

「よお、田が覚めたんだってな」

向かいのソファへと腰を下ろし、足を組みながら声をかけるが、少女はピクリと身体を震わすだけで、一向に口を開く気配はない。

しかし、そんなことを気にする風もなく、銀時は一人で話を進め

る。

「んでよ、腹減つてねえか？ あんなとこに閉じこめられていたもんな、ろくなモン食つてねえんじゃねえか？ 今なら俺の特製宇治金時丼食わせてやるぞ？」

「…………」

少女は視線だけ動かして銀時を見つめる。

すると、少女のお腹が可愛らしい音を立てて鳴つた。

その音を聞いた銀時はフツと微笑んだ。その微笑みを見た少女は顔を赤く染めた。

それからその笑顔のまま、スッと少女の前にどんぶりを出した。

そのどんぶりを見た少女はギョッと顔を引きつらせた。

それもその筈。なにせどんぶりの中にあるのは『飯にこんもりと盛られた小豆』のだから。

小豆など知らない少女にとつては『茶色い何か』にしか見えないわけで。

青ざめた表情で銀時を見上げると同時に、手に持ったどんぶりをペイッと払いのけた。

「んああああ！ 何すんだ、このガキ！ 俺の宇治金時丼を！ しかも今回的小豆は国産だつたんだぞ！」

床に落ちた宇治金時丼の残骸を見下ろし、ギャーギャーと喫く銀時。

少女はそのわめき声を聞きムツと顔を膨らませると、つこに我慢が出来なくなつたのか強硬手段に出た。

残つた力を振り絞り、銀時の服の裾を引っ掴むと、銀時を自分の方へと手繰り寄せた。強い力で引っ張られた銀時は身体のバランスを崩し、少女の方へと躊躇めぐ。

その隙を狙つて少女は銀時の服をずらし肩を露出させると、鋭く尖つた爪で軽く切り裂いた。

「ぐおー!？」

微かに感じた痛みに声を上げる銀時を尻目に、少女は傷口から流れ出した血を舐め取り始めた。

少女は銀時の血を舐め取つた瞬間、目を大きく見開き、ついには舐め取るのもめんどくなつたのか、鋭く伸びた口の牙を突き刺し、チューチューと血を吸い出し始めたのだ。

「ふ、ふあ・・・・・・・ん、んう、あ、ふ・・・・・・・

ゴクゴク・・・・・・と喉を鳴らして血を飲む少女。

しばらく銀時の血を飲んでいた少女であつたが、やがて満足したのか肩から牙を抜き取る。牙から血がツウと垂れたのに気づいた少女はペロリと舌で舐め取る。

血を吸われた銀時はしばらく放心状態であった。

もう何が起きたか分からぬ様子。

それもその筈だ。目の前の女の子が自分の血を吸うなんて、そんなメルヘンな。

「ただいま戻りました。って、えええええ！……！　ちよ、銀さん！　一体何してるんですか！？」

しかも、運悪く駄眼鏡が戻つてきやがつたから大変であった。

今はとにかく氣絶させてくれ。

銀時はバタリとゼンマイが切れたカラクリの様に、そのままの体制のまま後ろに倒れるのであった。

第3訓 吸血鬼って、ぶひちやけ蚊じやね？（後書き）

はい、今日はここまで。次から少女の名前が明らかに！　まあ、読者の皆様は知っていると思いますが（汗）。

まあ、何はともあれようやく銀時たちと絡みが出来ました。

第4訓 吸血鬼には、あれでしょ？ 蚊取り線香が有効でしょ？

神楽と新八は床に倒れている銀時と、ソファーの上で唇から血を垂らして恍惚の表情を浮かべている金髪少女を見比べていたが、次の瞬間

「うあああああああ！！ 銀さあああああああん！！ ちょっと！？ 銀さあああああん！！」

「銀ちゃん！？ ビうしたアルか！？ いじあ！！ そこの雌ガキ！！ 銀ちゃんに何したネ！？」

神楽がビシッと音が鳴るほど強さで少女を指さすと、少女はビクッと体を震わせ、今まで恍惚の表情が消え失せる代わりに恐怖に顔を染め、ブルブルと身体を震わせながら毛布を頭から引っ被る。

しかし、神楽たちの様子が気になるのか毛布の隙間から口ソ口ソとのぞき込んでいた。

神楽たちは床に倒れている銀時を見やり、何やら肩を寄せ合つて話し合つていた。

『か、かかか、神楽ちゃん！？ ビうじょうー？ い、いの女の子人間じゃないのかな！？』

『はっ！？ もしかして・・・・・・、またあの蚊の天人なんじゃないアルか？ あの女・・・・・・』

『ええ！？ あつ、でも確かに・・・・・・。口から血流していた

し・・・・・』

『キツとやうネ!! まるででもない男に孕まされたに違いない
ネ!!』

『それで銀さんの血を? まあ、確かに銀さんの血は甘いから、蚊
にしてみたら』駆走だもんね』

『そうに違いないネ!! 銀さんを助けるためにはあいつを追い出
すしかないヨ!!』

神楽と新ハはコクリと頷きあつと、決意した表情で金髪少女に向
き直つた。

少女は殺氣漂つ一人に恐れを抱いたのか、激しく身体を震わせ、
えぐつと恐怖に顔を歪める。

新ハは美少女の怯える表情を見て、思わず怯んでしまうが、神楽
はズズイと少女へとその足を踏み出し、フフフと不敵な笑みを浮か
べた。

「フフフフ・・・・・・。この歌舞伎町女王神楽様を怒らしたら、
どないなるか見せたるでえ!!」

ババツと懷から取りだしたのは・・・・・・・・・、何の変哲の
ないただの蚊取り線香であった。

少女は何が出るかびびつていたが、神楽が眼前に突き出した物を
見て驚きに目を見開けた。緑色のグルグル巻きでさつきちょから煙
から出ていた何かに、少女はただただ目を丸くして呆然と見つめた。

「…………あれ？ 神楽ちゃん、なんかあんま反応がないんですけど？」の蚊取り線香・・・・・・

「あれ？ おかしいアルな？ ああ、新ハ。これ一年前に消費期限過ぎてるアル」

「ちょっとおおおおおおおー！ 神楽ちゃん、そんなもの使わないでー！ はやくペッてしなさい、ペッてー！ ヴツー！ ゲホツ、ゴホツ、ゲホー！ か、神楽ちゃんー！ なんか煙が紫色になつてんだけビー！ なんか目に染みるんだけビー！」

新ハは「ホホホと激しく咳き込み、何度も田を擦りながら窓を開けようと窓枠に近寄る。毛布にぐるまつていた少女も「ホホホと可愛らしく咳き込む。

部屋中に紫色の煙が充满する中、神楽はその怪しい蚊取り線香を少女に突きつける。少女は咳き込みながらも、自分に突きつけられた蚊取り線香を引っ掴み、新ハが開けた窓の外へと放り投げる。

「ああー！ 何するアルー？ このチビガキ！ ！ ちよつと可愛いくからつてちょーしに乗るなヨー！ 次はこれアルー！」

神楽はキーッと癪癪を起こした猿の如く怒り狂い、少女に次の物を突きつけた。

その物とは・・・・・・・。

蚊退治スプレー『キンモール』であった。

「食らえアルうううううううう！」

「プシュウウウウウウウウ！」

神楽はキンモールを少女の顔面に突きつけると、その煙を至近距離で吹きかけた。少女は再び「ホホホホ」と激しく咳き込み、えぐえぐと嗚咽を零し始める。

可愛らしく端正な顔を悲痛に歪め嗚咽する姿を見て、意外にドSな一面を持つ神楽は嬉々とした表情で煙を吹き付けていた。

「フハハハハハハハハ！　どうネー！　一ヶ月ほど消費期限が切れたキンモールの味は！　！」

「つて！　また消費期限切れでんのかいいいい！　！」

と、外の空気を吸つて多少復活した新ハガそうつっこみを入れながら、神楽の後頭部をバシンと勢いよく叩く。

「いたああああああああ！　何するアルか、この駄眼鏡！！　お前のせいでキンモール落として中身が漏れてしまったアル！！　どう落とし前つけてくれるアルか！？」

「それはこっちの台詞だつーの！！　ほとんどお前のせいだらうが！！　てか、なんで消費期限の切れた物しかないんだよ！　！」

「知らないね。ワタシはただ襖の奥から取りだしただけね。文句があるならそこで寝ている銀ちゃんに家ヨ、この玉なしが」

ペツと床の上に睡を吐き捨てる神楽。それを見た新ハはピキイと青筋をこめかみに浮き立たせて怒り狂う。

「何してんだあ！！　このアマあ！！　いつの不良なんだよ！！」
「こは道路じやないんだよ！！」

と、互いに額を擦りつけ合つてメンチを切る新ハと神楽。その様子をすつかり蚊帳の外になつた少女が呆然とした面持ちで見つめていた。

オロオロと辺りを見回していると、不意に今まで床の上に氣絶していた銀時が凄まじい怒氣を纏いつつ立ち上がる。その怒氣に当たられたのが、今までメンチ切つていた新ハと神楽はビクツと身をちぢこませて、ギギギギッとゼンマイの切れたカラクリ人形のよう、ぎこちない動きで銀時の方へと振り向く。

もちろん驚き怯えたのは少女も一緒であった。

どうして？　しばらく立ち上がれないほど多量に血を吸つたのに。

どうしてこの田髪の男は立ち上がるの？

少女の動揺もそこそこに、銀時は屹然と面を上げ、

「てめえらああああああああ！！　氣絶した俺を放つて何をギヤアギヤアギヤ叫んなんだよお！！　テメエらはあれか？　発情期にさしかかった猿ですか、このヤロー！！」

と、家全体が揺れるほどの怒声を放つたのであった。

数十分後。

銀時の怒りが冷め止んだところで、銀時を交えて目の前の金髪美女へと再度向き直る。

金髪少女はブルブルと小刻みに身体を震わせ、未だに毛布にくるまっていた。

どうやら少女を完全に怯えさせてしまったようだ。

まあ、それもやうであります。一方的に攻撃を仕掛けたのだから。

あれ？ でも先に襲いかかってきたのはあの少女なわけだから、お相子じゅね？

しかし、世の中は美少女は正義！！ で動いている。

美少女が凄く得する世の中であり、例え美少女が悪くても、すべて許される世の中なのだ。

あーあ、俺も美少女に生まれたかったぜ、コンチクショ一。

「・・・・・・銀さん、心の声が漏れていますよ」

「はっ！！ 俺としたことが、血を吸われたことがシヨックすぎで頭がヘンに？ ああ、どうしよう。早く病院いかねえと・・・・・・

「ちよつと何自分だけ逃げよつとしているんですか」

ガシツと新ハが逃げよつとしている銀時の襟首を掴む。

「放せよ…！ いや、放してください…！ 後生だから…！ 何？ 吸血鬼なんて、そんなメルヘンなモン存在してたまるかあ…！ アレはほら…！ アレだろ？ 夏の暑さにやられた、少し頭が可哀想な女さ…！」

「いや、今は秋なんですけど。つか、実際に銀さんの血を吸つてましたよね？」

「いーや…！ 俺の身体の中には血なんてねえ…！ あの子の口から垂れてんのは俺のトマトジュースさ。糖分99%の」

「嘘つくなあ…！ ビリ見てもあんたの血ーでしょーが…！ つて、銀さんまた血糖値上がったんじゃないんですか…！ いい加減にしないとあんた糖尿病になりますよ…？」

と、銀時と新ハが言い合つてる中。神楽だけは少女が吸血鬼と知つた途端、田の色を変えて少女にまとわりつく。

「ねえねえ、名前なんていうアルか？ あつ、さつきしたことは謝るネ。ワタシてつきり蚊の天人かと思ったアルよ。悪氣があつたワケじやないネ。あつ、それで…！ 名前は何アル？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、未だ警戒を抱いているのか、神楽の問いに答える気配がない

少女。しかし、そんな少女に構わずに話をドンドン前に進める神楽。

「あっ！…じゃあ、定春の女バージョンで、定子ってこののはどうアルか？ めっちゃ可愛い」「エヴァ」思つ・・・・・・

神楽の言葉に割り込むように口を開いた少女

エヴァ。

どうやらよくない気配を感じ取つたらしく。あやつり自分の名が定子にされたるところだったのだから、当然と言えば当然の反応であった。

「おお！… エヴァアルか！… 中々に良い名前アルな。でも、やっぱり定子の方が・・・・・・」

と、神楽がもう一度その名を口にしてエヴァの方を見やるが、エヴァは半泣きになりそうな表情のままブンブンと拒むように首を振つたのであった。

その後ろでは銀時と新ハガ不毛な言い争いを繰り広げていたのであつた。

「このオタク駄眼鏡が…！」

「何だとお……この糖分天然パーマネント…… お通ちやんを馬鹿にするなよ、コンヤロー…！」

第4訓 吸血鬼には、あれでしょ？ 蚊取り線香が有効でしょ？（後書き）

ハイ、今日はここまで。中々更新が続かずすみません。よつやくエヴァの名前が出せました。

次はエヴァをこれからどうするかといつ話に入ります。

これから展開が難しいですが、頑張りますのでよろしくお願いします。

第5訓 吸血鬼飼いつて？ 食費かからないならいにょ。

銀時と新八は顔を一倍に腫れ上がらした、実に悲惨な体裁のままエヴァに向き直る。いや、強制的にと言つた方が適切だろつか？

一人の言い合いにぶち切れた神楽は暴力で事を強制的に収めたのだ。

夜鬼族である神楽に一人は手も足も出ず、散々に殴られたり蹴られたりしてのである。

銀時は鼻から鼻血を垂らしながら、

「…………んで？ その、なんだ？ エヴァつったか？ あのよ、その吸血鬼なのか？」

「…………」

銀時の問いにコクリと静かに頷くエヴァ。その表情からは強い警戒の色が窺えた。

「はあ～、マジかよ。まさかこの世にメルヘンな生物が存在するとはよお。てつきり俺の中の妄想が作り出したモンだと思つていたが、まさか実在するとは。神も仏もねえよ、コンチクショ～」

と、顔を手の平で覆い、絶望を含んだ声音で呟く。

意外とオカルトとかホラーが苦手な銀時は、その象徴である吸血鬼が目の前にいることに嘆いた。

願わくは夢であつて欲しい。しかし現実といつもののかくも残酷なものだ。

「銀ちゃん、そう何度も確認取らなくても。それに、ほら。物は考えようですよ。この前の蚊の天人より、エヴァちゃんの方が可愛くていいじゃないですか。役得ですよ、役得」

「はあああああん？ 役得つて、一体だれ得だよッ？ 僕のこと言つてんのか？ 生憎だが俺はそんな特殊な性癖は持ち合わせてはいねえ！…」

と、新八の言葉を聞いて余計に神経を逆なでした銀時が叫ぶ。

その声にビックリしたのか、エヴァはブルブルと身体を震わせて小さな肢体を更にちぢこませる。

「ああ～～～～～！ こんの天然パーマネント！！ 何エヴァを怯えさせてるネ！…」

と、エヴァの横に座りながら酢昆布を囁いていたが、喚き散らす銀時の額へとエルボーを食らわす。

見事にエルボーを食らつた銀時は後方へと激しく突っ込み、襖に頭から突き刺さる。

銀時はあまりに急な神楽の攻撃に悲鳴を上げる間もなく、襖に頭を埋没させピクピクと身体を震わせる。

その光景を見たエヴァは余計に怯えて鬱々とばかり。

流石にこのままでは状況が進まないのに気づいた新ハは、気絶した銀時を襖から引っ張り出し、暴れないように荒縄でグルグル巻きに縛った。

それから神楽にも釘を刺し、ゴホンと咳払いした後、エヴァに向き直る新ハ。

「さてと…………、エヴァちゃん。いきなりで悪いんだけど、この後どうするの？」

「…………」の後？

「やつ」

新ハにそう問われ、エヴァはしばし黙考した。

これからどうしようか…………。

少なくともここにはいられない。吸血鬼とばれた時点で、それは決定事項であった。

この神楽という少女は自分に友好的に接してくれるが、いつ手の平を返して襲つてくるか分からないし、この氣絶してゐる白髪の男は自分のことをあけすけに怖がっている。

この眼鏡は…………、どうでもいいや。

「…………よく分からない。吸血鬼の私にまどこのにも居場所がないもの。どこに行つたらいいか、何をしたらいいのかよく分らない…………」

と、エヴァはポツリと呟く。

それは自分の本音であった。吸血鬼になつて数十年の間、一人で安住の地を求めて旅していた中で行き着いた結論であった。

吸血鬼は人間の敵だ、害虫だ、どこに行つてもそう罵られ後ろ指をさされ、理不尽な暴力をこの身に振るわれた。

そんなことがあってからか、私は人間が少し怖くなつた。元・人間なだけに余計に。

しかし、私たち吸血鬼は人間がいないと生きていけない種族。それは猫の身体に規制する蚤のよつた、実にちっぽけで惨めな存在。

しばらく沈黙が続く。どんな風に声を掛けたらいいのか、新八も神楽も分からぬ様子であつた。

しかし、そんな沈黙を一人の男が破る。

その男とは氣絶していた白髪の男
坂田銀時

であつた。

「…………ぐだらねえな、全くよお。そんなちっぽけなことを悩んでんなら、はなつからな考えなきやいいじやねえか」

「銀さん！？ いつから起きてたんですか？」

「ついさっきな。おい、ガキ。俺の新鮮なトマトジュース啜つておきながら、逃げようなんて思つてねえよな？」

銀時の発した言葉にエヴァは伏せていた目を大きく見開く。

「この男は何を言つて居るのだろう? つこちあまで私のことを怖がつて居た癖に。

エヴァはそう心の中で銀時の悪態をつづくも、内心銀時の次の言葉に期待していた。

その期待は、やがて確信に変わつた。

「いいか、テメエはこの俺に宣戦布告したんだからな。俺を負かすまでここから出られないと思えよ。ファンタジーな存在に負けたなんて知られたら、恥ずかしくて面も歩けねえしよ」

「銀ちゃん!! 本当にエヴァ!!」に置いてもいいアルか!!」

「ああ、侍に一言はねえ!! そのかわり、諸々の世話はテメエがしろよ。トイレの世話しかり散歩の世話しかりだ」

「勿論ね!! 歌舞伎町女王は嘘つかないネ!!」

と、意氣込んで声高らかに宣言する神楽。

「つーーーー 前もそんなこと言つていたよね!! 定春を飼うときもーーー つか、エヴァちゃんを定春と同等に扱わないで下さいよ、銀さんに神楽ちゃん!! 「ゴメンね、エヴァちゃん。イヤだったよね?」

「・・・・・」

エヴァは新八の問いにフルフルと首を横に振った。

こんなに楽しい時間は吸血鬼になつて初めてだつた。

それと同時にこの人間たちは心の広さに感謝した。吸血鬼である自分を受け入れてくれた人間は彼らが始めてであつた。

「…………ありがとう、ヒツ」

エヴァは小声で二人にお礼の言葉を口にすると、吸血鬼になつてから初めて笑みを浮かべた。

「そう言えば、銀ちゃん。吸血鬼って何を食べるアルか？」

「はあ？ そりやあテメヨトマニシニースだマ」と、絞りたてのサ

「いや、違うでしょ？」「吸血”鬼なんですから、血でしょ！」

「おお！！ なら、食費が浮いて良いアルな！！ とにかく銀ちゃん血つて美味しいアルか？」

「さあな？ 本人に聞いてみたらいいんじゃね？」

神楽はエヴァに向かつて飛びつくよにとして抱きついた。その反動の強さに思わず躊躇めくエヴァ。それに構わずエヴァに尋ねる神楽。

「血つて美味しいアルか？ ねえねえねえ、どうアルか？」

エヴァは耳元でしきりにそう尋ねてくる神楽を煩わしいと思うが、久しぶりに触れる人の温もりを感じ、心からの微笑みを浮かべたのであつた。

第5訓 吸血鬼飼いつか? 食費かからないならこよ。(後書き)

はい、今日はいじままでです。この作品は毎週水曜日に更新しようつと思います。

エヴァが万事屋に仲間入りしました。わあ、これからどういった展開にしようか、考えをまとめてみよつと想つます。

第6訓 吸血鬼と触れあつてみよひ。だけど、血を吸つのはかんべんな。

「さて、この問題も一段落したところで

」

「ところで、何ですか？」

と、妙に部屋を暗くし懐中電灯を顔の下から照らしながら呟く銀時を、白けた面でつっこむ新八。

同じく酢昆布を嚼る神楽と、その横に未だ状況が理解できていなイエヴァも銀時の周りに集まる。

「ああ？ あれだよ、ほらエヴァがこの万事屋にじばりく暮らすからよ、それを記念して……」

と、言葉を一旦切り部屋の電気をつける。

すると、四人の目の前にガスコンロの上に乗った土鍋が姿を現した。

どうやら中身は入つておらず、透明な汁だけがグツグツと煮えていた。

「……これなんですか、銀さん」

と、無表情な新八がポツリと呟いた。

「ああ？ 何つて鍋だよ、鍋。これがグラタンに見えるのかね、新八君は」

耳を穿りながら小馬鹿にした口調で言つ銀時に、新ハはバンッヒ
テーブルを叩きながら、

「んなもん見たら分かるわ！！ 僕が言いたいのは何でいきなり鍋
パーティを開始するというのと、鍋の具が何にも入っていないのか
といふことなんだよッ！！」

「そうアル！！ なんで汁だけなんだヨ！！ いつもならエノキと
白菜くらいは入つてゐるね！！」

「オイツ！！ 失礼なことを言つたな！！ 豆腐も入つてゐるじゃねー
か！！」

ズゴオオオオオオ！！！

神楽と新ハは銀時の言葉に盛大にこける。

ただ一人この流れについていけないエヴァだけがポカンとした表
情で固まっていた。

「たいして大差ねーじゃねーかあ！！！ つて、僕が聞きたいのは
そんな事じゃなくて！！ なんでエヴァちゃんの歓迎会するのに鍋
パーティするかを聞いてるんですよ！！」

と、復活した新ハが再度そうつっこむ。

「ほら、昔の人も言つたじゃねえか。鍋は人生の系図。みんな仲良
く鍋突きあって親睦を深め合うのも、古来の人の知恵なんだよ。俺
たち現代人はそれに肖つてゐるだけだよ」

フツとしたり顔で呟く銀時の顔面に神楽の正拳突きがめり込む。

銀時は鼻血を垂らし、田元を黒く腫らしている無様な恰好であつた。

「フン、一丁前に何いうアルか。ただ単に金がないからケチつただけでネ！――この歌舞伎町女王の目は誤魔化せないヨ――！」

「あ～、やっぱり？ 僕も薄々そうだと思つてました。最近依頼がないから金欠気味だし、『馳走買う金がないですしね。』にしても・・・・・、汁だけとは、少しくらい奮発してもバチ当たらないでしょ！？」

「あへ、そう言つてもよ。最近の天候不良で野菜買うにもバカに何ねーんだよ。銀さんだつてな、本当はお前らにいいモン食わせてやろつと努力したさ。でもよ、努力は中々に報われなくて」

「ふうん、へえ～。じゃあ、銀さん。さつき机の上にあつたジャン
プー君は何なんですか？」

「うえ！？ ああ、ほらジャンプが俺を呼んでこよくながして、
気がついたらついついレジへと・・・・・・」

「「巫山戯るなああああああああああ！」！」

ドケシイイイイイイ！――――――――――――

怒り狂つた新ハと神楽は銀時の身体に見事な飛び蹴りを食らわす。もろに食らつた銀時は勢いよく回転しながら頭越しに襖へと突き刺

れる。

「ついいってなんだ！！ ついいって！？ テメエ絶対確信犯だろーが
！？」

「そうアル！！ 最初から鍋の具買う気なかつただろーがあああ
！！！」

「ドガツ！ バキイ！ グシャー！ バキドカバキドカカカカ力！？！」

「ちょ、ちょ、まつ！！ 悪かつたつて！！ ほんと！！ マジ、
悪かつたつて！！ その、人の、グhaar！！ 話をゴボオ！ 聞けつ
つーの！！！」

新ハたちの攻撃を食らつていた銀時は弁明しようと試みていたが、
あまりにしつこすぎる攻撃に銀時はブチ切れバネ仕掛けの人形の
ように跳ね起き、散々に殴りつけてきた神楽と新ハを吹つ飛ばす。

「つおおおおおおー！？」

「ぎやああああああああー！？」

今度は一人が頭から襖へと突き刺さる。

「つたくよ。人が大人しくしてれば調子にのりやがつて。銀さん
はあれか、サンドバックですかこのヤロー！」

と、氣怠そうに肩を回しながら呟く銀時。

「んだよーーー！ 元はと言えばこんな巫山戯た鍋出してくる銀ち

やんが悪いネ！！ ワタシらは悪くないヨ！！」

ガバアアア！！ と襖から顔を出しながら叫ぶ神楽。

「そうですよ！！ だいたいエヴァちゃんが可哀想でしょ！！ せつかくの主役なのに、こんなしけた鍋出されちゃ！！」

と、神楽と同じく襖から顔を出しながら叫ぶ新ハ。

するとその様子を呆然と見つめていたエヴァが、

「・・・・私は吸血鬼だから、別に食べ物食べなくても平気なんだけど」

と、申し訳なそうに答える。

そんなエヴァに神楽は指を突き刺して、

「ダメアル！！ そんなんだから身体が貧相何だヨ！！ 血ばつか
食つちやダメネ！！」

「いや、だから私吸血鬼だから血を吸つて当たり前なんだけど・・・

と、うそざうとした表情で答えるエヴァ。

「つか神楽ちゃん、いつもたくさん食べてるのに、なんで少しも成長しないブボアアアア！！！」

新ハがそう口を開くと、神楽はその頬に見事なエルボーを食らわ

す。

新八は顔を変形させながら壁に身体を打ち付ける。

「五月蠅いネ、この駄眼鏡。ワタシの食欲はあんくらいじやちつとも収まらないアル。それにワタシは成長期ネ。これからグングン成長するアル！」

「つーか、いつかテメエ縦じやなくて横にでかくなブオワアアアアアアーーーーー！」

と、失礼なことを口走った銀時も手にした番傘の一殴りで黙らせる。

「つたぐ、失礼なオスドもネ。いつかワタシがナイスバディな女になつたら、見返りとして酢昆布一年分献上するアルヨロシ」

と、首に下げた襷を抜き取りながら撫然とした表情で呟く神楽。

その間にも鍋の中の汁は溢れんばかりに沸騰させ、それを興味深そうに見つめるヒガア。

神楽にぶつ飛ばされた新八と銀時は喋るのもままならないまま、ピクピクと身体を断続的に震わせるのであった。

さて、万事屋の鍋パーティはこのままお開きになるのだろうか？

その結末は次回へと持ち越しである。

第6訓 吸血鬼と触れあってみよ。だけど、血を吸うのはかんべんな。（後書き）

今日はいこまでです。昨日は投稿できなくてすみませんでした。
次の話は闇鍋パーティにしようかな？ ドバドバと入れるから面白
そうじやんね？

第7訓 吸血鬼とカシラとペンギンみたいな何か

さてさて、争いが一段落した頃。

銀時たちはやつときより散乱した室内の中で、机の上に置かれたガスコンロの上で、グシグシと煮えている土鍋の周りをグルリと囲むようにして集まっていた。

「…………それでどうするんですか。やっぱり何か具がないと格好が付かないでしよう色々と」

「やつアル。ワタシせめてやつすい豚肉でも良いから食いたいアル。」
「いや、しゃぶしゃぶ」と

神楽は豚肉をしゃぶしゃぶするマウンテンポーズを取りながら、頬を膨らませ唇を尖らせて呟いた。

「くつ、しゃぶしゃぶだと。んなもんあつたら俺が食いたいわ。大体テメエらは口を開くと、すぐしゃぶしゃぶ言いやがつて……あれか？ テメエらはしゃぶしゃぶにされる豚の気持ちが分かってるのか、ああん！？」

「つて、どんだけあんた豚に感情移入してんですか！？ 銀さんもいつもは躊躇無くしゃぶしゃぶを口にしているのに……？ 都合の悪いときだけ豚を擁護しないでくださいよ！？」

「バンッ！ 」と机が強く振動するほどに手の平を叩きつけた。

ガスコンロの上に置かれた土鍋が揺れ、中身に入った汁が少量に

零れた。

すると、汁が零れるのと同時に、

「フハハハハハハハハ！ 銀時、この時を待っていたプロボオアアアアアー！」

高笑いを上げながら窓を豪快に突き破つた人物、それは攘夷志士の桂小太郎と相棒の宇宙生物であるエリザベスであった。

桂とエリザベスはあまりに派手な登場だつたためか、家主である銀時の怒りを買って木刀をぶん投げられたのだ。それをもろに食らつた桂はバランスを崩し、玄関に通じる襖を突き破つて豪快に転がつたのであった。

「うつせーよ、ヅラ。空氣を読めよ、空氣。誰もテメエなんか読んでねえよ」

「そうネー！ お前のせいでエヴァが怯えて布団から出でこないアル！ どう落とし前つけてくれんだゴルアアアアツー！」

と、ボロボロになつた桂にトドメをさしにかかる神楽。

ドカ、バキイ、ドカカカカカー！！！

と、殴打する音が聞こえながらも、銀時たちはどこ吹く風。

唯一毛布にくるまつたエヴァだけがチラチラと玄関の方へと視線を向けて、暴虐の限りを尽くす神楽の様子を伺つのであった。

数十分後。

顔が一倍に腫れ上がった黒髪の貴公子こと桂小太郎とエリザベスが、銀時たちの輪に加わりグツグツ煮える鍋を見下ろしていた。

「…………時にして銀時」

「…………ああ、なんだよ」

銀時は鼻をほじりながら桂の問いかけに答える。

桂は鍋と毛布にくるまつてこるエヴァを交互に見やりながら口を開く。

「EJの鍋に具がないのと、ソファーの上を占領している毛布の固まりに、俺はさつきから疑問を抱いているのだが…………」

「具がないのはお金がないからで、毛布にくるまつてこるのは、今回うちで預かることになつたエヴァンジエリンですよ」

と、新八が桂の質問に答える。

「えう、あ、ん、じえりん？ 何だ、その長い名前は？ どういう風に呼べばいいのだ？ というか姿を現せ、娘。己の姿を恥じるものではない。むしろ俺は君の姿がピチピチのお嬢さんより、ムチムチのお嬢さんの方がタイプだ。だから姿を恥じる必要はないぞ、うん」

と、途中から自分の好みの女性像を語り始める桂。その頭を神楽がバシンッと叩く。

「なにエヴァを口説いてんだテメエ！！ つか今の発言はエヴァに失礼アル！！」

「何するんだリーダーあああああ！！ 僕はだな、そこの毛布にくるまる者に少しでも緊張を和らげようと・・・・・・」

「無駄だぞ、神楽。こいつはな、昔からこういう奴だよ。話の趣旨が外れることなんざ日常茶飯事。それにこいつの好みの女は昔から年増つて決まつてんだよ」

すかさず横から銀時が茶々を入れる。

それに過敏に反応したのは勿論桂である。

「何を言つ貴様！？ 僕のことはともかく、貴様の方こそ問題大ありであろうが。人の話は聞かないわ、やる気はないわ、死んだ魚の目をしてるわ、銀髪で天然パーだわ、甘い物ばかり食つて糖尿病寸前だわ、貴様の方が俺より問題多すぎではないか！！」

「んだと、『らあああ！！！ 嘘嘔うつてんのかコンヤロー！！』

「それはこいつの台詞だ、銀時！！」

顔を近づけあって互いにメンチを切る桂と銀時。バチバチと両者の間で火花が飛び交う。

銀時たちを蚊帳の外に放り出し、新八と神楽はエリザベスと会話

を展開していく。

えっ？ あの一人は放つておいていいのかって？ いつもの」と
だからいいんだよ。

「それでエリザベスさん。今日は一体何のよついでここに来たなんですか？」

【実はしばらく出番がないことに桂さんが怒り出しまして。こつして実力行使に出たというわけなんです】

「そうアルか。まあ、たしかに最近ヅラは出番がないアルから、話は分からないうことは^三。しかし、よりもよつて一番大切な時に来なくても良いのに。本当気のきかねえーな、あのヅラはよ」

「まあまあ、そう言わないで。せつかく来て貰つたんだし、もうこのまま鍋パーティに参加して貰おうよ。人数は多い方が楽しいしさ」

「ケツ・・・・・・・、これだからこの眼鏡は。これ以上人数増やしてどーするアル!? こんなしけた具でこれだけの人数の腹が満たされると思っているアルか貴様〜〜〜〜〜ツ! ?」

「つおおおおおおおーー！ わよ、神楽ちゃん落ち着いてーー！ 僕を襲つても鍋の具は出ないからーー！ 何か内蔵的な物が出るだけだからーー！」

【あつ、別にその眼鏡のホルモンでいいんじゃね？ この際
新八の胸ぐらを引っ掴み持ち上げる神楽を、新八は必死に押さえ
ようとする中、エリザベスはというと一人呑氣に茶を啜りながら、

と、書いた札を上げる始末。

と、渾身の雄叫びを上げてどうにか一いつにか神楽の手から逃れる。

すると、銀時と取つ組み合いをしていた桂がこちらの方に視線を向け、

「喜べ、皆のものーー！」の俺がこの場を開拓する良い案を思いついたぞーー！」

いやに自信満々な表情を浮かべる桂であつた。

「んで? 何だよ、良じ案つて?」

「ふむ、さつき新八君のホルモンを鍋に入れるというので思いつい
たのだが・・・・・」

口籠もり神妙な表情を浮かべる桂を見て、銀時たちも真剣な顔つきになり、辺りに何とも言えない緊張が走る。

「……………皿で闇鍋をつぶすのがだが…」

ドオオオオオオン！――！――！

桂の発言の後、一瞬妙な空気が辺りを包み込んだが、

「アホかああああああ――！」

と、我に返つた銀時と神楽によつて盛大なツツ「//」を頭にお見舞
いされるのであつた。

第7訓 吸血鬼とかシラヒペンギンみたいな何か（後書き）

今日せいいちまで。いやに短くてすみません（汗）。

今日は導入部ついで事で勘弁してください…。

第8訓 間鍋をはじめよ!つい一 前篇

間鍋。

それは鍋界の中でも禁断の鍋と称され、食すものには必ず死が訪れるといわれる

その間鍋が『』『万事屋銀ちゃん』で誕生しようとしていた。

桂、エリザベス、銀時、エヴァ、神楽、新八、の順に机の周りを囲み、机の真中に置かれたガスコンロの上でグツグツ煮える鍋を見下ろしていた。

重々しい雰囲気の中、それを看破するかのように口を開いた人物がいた。

もちろん、我らが主人公 坂田銀時である。

彼は自分が殴つて眼の下に青痣ができた桂を見やり、いつもの仏頂面のまま口を開いた。

「んで? テメエが立案した間鍋? だつけ? あれさ、大真面目で言つてんの?」

「そりだが。何だ、銀時。貴様の低能な脳みそでは嘘か真かも見抜けなんだか?」

「何だと、『ラアー! 僕はなあ! 何が悲しくてお前と間鍋な

んざしなくちやいけねえの！？ ビうせするなら某主人公らしく美女に囲まれてやりたかったわ！！」

銀時の言葉に反応したのは、エヴァの横に座っている神楽であった。酢昆布を鍋汁で煮ていた神楽は銀時の放った言葉に猛然と食らいついた。

「何ぬかすアル！！ この天然パーマネント！！ ワタシのこの美貌にどこが不満があるネ！！」

「ああ～ん？ 誰が美少女なんですか？ そういう[冗談はエイプリールフルールだけにしどけ」

「何だと『ゴルア！！ もうこいつペん画つてみろッ！！』このクサレ侍～～～～！！」

ダンツ！！ と机の上に片足を乗せ、銀時の襟首を怒りにまかせて持ち上げる。それからまるでカクテルを振るバーテンダーのように、華麗な動作で銀時を激しく揺さぶる。

その動きに合わせて鍋の汁が大きく波打つ。

「ちょ、ちょっと、まーー 神楽、お、おれが、わる、わるかった、つてーー！」

銀時は脳をシェイクされながらもどうにか謝罪の言葉を口ににする。

しかし、怒りで我を忘れている神楽は銀時の言葉に耳を貸すわけもなく……。

まるで縄張りを荒された「コラのように怒り狂っていた。

それを見かねた新ハが一人の間に入り、

「神楽ちゃんに銀さん！！ いい加減にしてくださいよ、アンタら
！！ 一人が暴れたから汁しか入っていないのに、大方鍋から零れ
ちゃいましたよ！！」

と、鍋の中を指さしてそう怒鳴ると、あれだけ怒り狂っていた神
楽も大人しく矛を收め、銀時の襟首から手を離し自分の席へと再び
腰を下ろす。

どうやら食い物が絡むと大人しくなるようだ。

さすが大食い娘。

さて、どうにか闇鍋を開始するかという雰囲気になつた頃、今まで沈黙を保っていたエヴァが恐る恐る手を挙げた。

「……あの～、ところで闇鍋って一体なんなの？ 何を入れる鍋なの？」

と、素朴な質問を口にした。

その質問に律義に答えたのは、お馴染みのオタクメガネ新ハである。

「おいつ！！ オタク＝メガネっていう誤解を招く説明は止めんか
い！！」

といつ言葉が聞こえたが、華麗に無視して。

「あのね、そもそも闇鍋つていつのね……、簡単に言ひと句でもアリな鍋かな」

「何でも？」

「そう、食べられるものなら何でも入れていいんだけど。極たまに食べられないようなものも平気で入れる人もいるから、その点が闇鍋の恐ろしさとこるなんだよね」

新八は何か言いたそうにチラッと銀時の方に視線を向ける。

その視線に気づいた銀時がジト目で、

「……わつかのチラ見はなんだよ、ぱつつかん」

「別に～。まあ、そういうわけでエヴァちゃんも何か入れたいものがあるんなら、遠慮なく入れてね。あつ、でもなるべく食べ物でお願いしますーーーー！」

と、最後のセリフは血走った目で念押す新八であった。

エヴァはその気迫に押されて「クククと何度も頷いた。

それから一時間後

。

全員各自用意した物を手に鍋の周りに集つた。

「それで皆の物。ちゃんと用意してきたであろうつな？」

「おへ、いひなつたら闇鍋でもなんでもやつてるわ」

「そうですね。背に腹は代えられないです」

「そつアル！ 醋昆布ばつかり食つてられなこヨー！ 何でも良
いから噛みごたえのある物食いたいアル！」

『マジ』

（・・・・・）の人たちの傍にいて良いんだろつか？）

と、それぞれ口にしたあと、一様に頷くと直ちに用意した物を机の
上に出すのであった。

第8訓 開鍋をはじめよりー 前篇（後書き）

短いですが、すみません。それと一日遅れてしましました（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6193v/>

エヴァと万事屋銀ちゃん

2011年10月8日22時01分発行